ISSN 2185-341X

紀要

前期土偶の根本的性質と展開過程 ……瀬口　眞司（1）

近江の埴輪棺墓と地域間交流 ……宮村　誠二（15）

県内出土の木製人形代について ……中村　智孝（23）

古代中世の規格流通材「ヘギ板」を考える ……横田　洋三（31）

将棋史研究ノート9
　―飛車と角行の登場― ……三宅　弘（38）

北朝期・室町期の近江における京極氏権力の形成…北村　圭弘（47）

31

公益財団法人滋賀県文化財保護協会　2018.3

紀　　要

第　31　号

平成 30 年（2018 年）3 月

公益財団法人滋賀県文化財保護協会

前期土偶の根本的性質と展開過程

瀬 口 眞 司

１．序論

（１）前稿の概要

筆者の研究テーマの１つは、〈土偶の根本的性質と展開過程〉の解明である。その一環として、前稿では初期土偶を対象に検討を加えた（瀬口2015）。ここで言う初期土偶とは、日本列島における土偶出現期の資料を指し、旧石器時代後期から縄文時代早期までの土偶とその関連資料が相当する[1]。

本稿では、この初期土偶に後続する縄文時代前期の土偶を対象とする。前稿の成果を踏まえながら検討を重ねることになるので、具体的な作業に入るにあたり、前稿の概要をまず整理しておきたい。

前稿の論点は、〈初期土偶の根本的性質と展開過程〉である。これを解き明かすために３つの検討を行った。

検討１では、初期土偶の類型化とその内容の整理を行った。先行研究の果実も糧にしながら、類型の弁別を行い、甲類と乙類に二大別した上で13類型を認識した。

このうち、甲類は頭部を中心としたパーツの造形（図１左）、乙類は胴部を中心としたパーツの造形である（図１中央・右）。造形された土偶の大半は乙類で、甲類は量的に稀少だった[2]。

検討２では、量的に主体を占める乙類にまず焦点を当て、その〈共通要素〉の抽出と考察を試みた。〈共通要素〉とは、各類型の間で通時的・共時的に繰り返し現れる要素を指す[3]。手を替え、品を換えながらも繰り返し表現される要素であることから、この〈共通要素〉こそ、造形群の根本的性質を解き明かす糸口になると考え、これに着目して資料群を観察した。結果として、乙類の〈共通要素〉は、その胴部上端中央に用意された〈満たされていない空間〉であることを見出すに至っている（図１）。

この〈満たされていない空間〉をソケットとして捉え、甲・乙のそれぞれが示している部位に着目したとき、甲類とは乙類のソケットを満たすプラグだと位置付けられる。土偶が人体を模式的に示したものだとするならば、このプラグとソケットを分離・分割して表現するよりも、両者を一体化し、〈満たされた状態＝β態〉で具象化するほうが自然に見える（図２下段）。しかし、そのように具象化された例は、初期土偶においては皆無である。加えて甲類そのものが具象化されることもまた稀である。

これらのことを考え合わせるならば、乙類だけで実際に表現され続けていた〈未だ満たされていない状態＝α態〉の具象化こそ、初期土偶における造形の主目的だったことが見出せる（図２上段）。この点をもって、初期土偶の根本的性質とは、〈満たされることを待つ器〉を象徴するところにある、と結論付けた。

検討３では、〈共通要素〉の継承に注目しながら、初期土偶の展開過程について改めて整理を試みた（図３）。結果、乙類における〈共通要素〉は、最古段階である旧石器時代後期～縄文時代草創期前半から既に見出せること、甲類はしばしば暗示的に用意されるという意味で潜在的ではあるが、甲・乙の二類で構成されるセット関係もまたこの段階から認められること、以降、様々な方法で〈共通要素〉が繰り返し表現され、多様なヴァリアント（異本）が諸類型として生み出されていくこと、その一方で、早期前葉の後半からは類型の統合や淘汰も進み、潜在化していく類型の流れと、前期につながっていく可能性のある類型の流れに分かれていくことなどを論じた。

以上が前稿の概要だが、課題として縄文時代前期以降の様相に対する検討を挙げていた。本稿は、その課題に応じるための作業の１つである。その論点は〈前期土偶の根本的性質と展開過程〉だ。前稿で見出せた初期土偶の根本的性質は、前期においてどのように継承され、いかなる変容を見せたのか。これらの点を本稿では問う。

（２）研究の現状

根本的性質に関する研究　本稿の論点のうち、前期土偶の根本的性質に関する研究の現状をまず簡潔に整理しておく。

この論点に関しては、初期土偶と一括して論じられたものが多い。その代表的な意見の１つは、乳房の表現が見られることなどを根拠として土偶を女性像と見なし、その点から妊娠・安産に関連した護符的存在だと想定するものである（春成2009ほか）。

ただし、この想定には検討の余地があるかもしれない。というのも、山田猛氏や松室孝樹氏が指摘するように、資料のあり方を数量的に整理すると、女性を示す要素の出現頻度は必ずしも高くないからだ（山田1999、松室2013）。

この点をより明確にするために、本稿で扱う前期の資料89点を対象とし、乳房表現の出現頻度を試みに算出すると、その値は21.3％となる。妊娠表現の出現頻度は更に低くて0.0％である。やはり、女性を示すとされる要素の出現頻度は必ずしも高くない。

立派な乳房を持つ土偶は確かに存在するので、土偶には「女性」性を表現したものがあることもまた確実だ。しかし、

特に土偶の原型が形作られていった初期土偶や前期土偶の段階を観察する限り、乳房や膨らんだ腹部などの出現頻度は必ずしも高くない。資料やデータに基づくならば、当時の製作者たちにとって〈女性〉性が不可欠な要素だったとは言い難く、乳房や妊娠表現は、前期土偶の根本的な性質を規定する第一義的な要素だったとは考えにくい。

この点を我々はいま少し注目すべきだ。土偶を女性として絶対視し、観点を固定化し続けるならば、これまでと同じ見解しか結局は生まれない(4)。土偶とそこに込められた世界観をこれ以上広く、そして深く掘り下げていくことなど、もはや期待できないだろう。しかも資料やデータは、その見解を必ずしも裏付けてはいない。そういった意味で、前期土偶の根本的性質に関する研究にはまだ検討の余地がある。

そこで本稿では、この余地を埋めていくための観点を整えた上で、改めて検討することを課題の１つに挙げたい。

展開過程に関する研究　かたや前期土偶の展開過程に関する先行研究としては、小笠原好彦氏の編年作業がある（小笠原1984）。氏が対象にしたのは東北地方の資料で、前期前葉から中期までの資料を分類し、編年した。

より巨視的な観点から検討したものとして、原田昌幸氏や市川恵子氏の業績などがある。このうち原田氏は、組織的に実施された悉皆的な集成をもとに、初期土偶と前期土偶の諸型式を設定し、様式論的な理解の推進を試みた（原田1995・1997）。

一方、市川氏は、東北地方、関東・中部地方といった前期土偶の集中出土地域を対象とし、「土偶形式変遷の再編」を行った。そして、両地方の状況を組み合わせながら見ていくことによって、それぞれの特徴と全体的な流れの明確化を試みている（市川1999A・B）。

これらの展開過程に関する研究の到達点としては、資料の精緻な集成に基づく緻密な型式学的理解が挙げられる。特に型式間の相違を明確化し、それらの時間的・空間的な位置付けと流れを整理した業績の数々は、研究の基盤を盤石にしたという意味で揺るぎない意義がある。

ただし一方で、検討の余地もある。最大の課題は、前期土偶の用途や意味、性質に関する理解へのフィードバック／還元だろう。

土偶研究にも大きな影響を与えた泰斗・八幡一郎は、かつて、無形の精神活動を先史学が探ることの困難さを述べ、従来の民俗例を援用した推察方法を批判した（八幡1939）。そして、従来の土偶研究法の限界と研究の停滞を乗り越えるための新機軸をいくつか提言している。

その１つは型式学的・編年学的資料操作であり、「先づ土偶の型式を調査し、型式の歴史的序列と地理的分布を吟味することにより、土偶の変遷並びに文化圏との関係を極め」れば、文化圏内の「他の文化要素との関係によって、該型土偶を生んだ社会的背景を知ること」が可能となり、「さすれば土偶本来の姿を求めることが出来、それによって真の意義の把握が可能になろう」と見通しを述べた。その後も、小野美代子氏や米田耕ノ助氏をはじめとする多数の優れた研究者が同様の見解を述べ、多くの研究者が尽力を続けている（小野1984、米田1984ほか）。

ただ、やはりその作業は容易なものではなく、土偶の用途や意味、性質に関する理解への本格的なフィードバックの成功事例はまだ多くない。そういった意味で検討の余地は極めて大きい。そこで本稿では、原田氏や市川氏の成果を糧にしながら、この検討も併せて課題にしたい。

（３）本稿の方針

以上のような課題と向き合っていく際に重要なことは、先にも述べたように観点を整え、見直すことだ。

前期土偶の研究は重厚かつ有意義な蓄積に満ちている。本稿でも基本的には先学と同様な作業をトレースし、先行研究の果実を糧に駒を進めることになる。しかし研究史が物語るように、その研究に倣うだけでは、従来の到達点を乗り越えるものにはならないだろう。何らかの工夫が必要である。

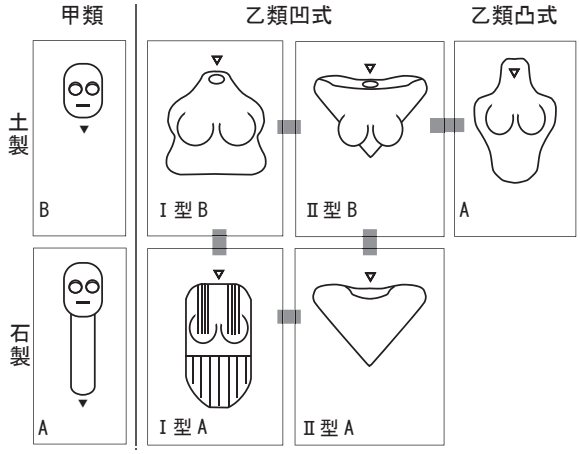
そこで、本稿では先行研究に学びつつも、若干のアレンジを研究の観点に加えたい。例えば研究のレベルを現状の高みにまで引き上げた原田昌幸氏は、〈土偶型式〉の設定に力を注いできた。そこでは類型の弁別と相違点の認識が重視され、それを起点にして地域的特徴、時期的変遷が精緻に整理されている（原田1997）。その方針と方法は考古学研究における基本であり、もちろん本稿でも踏襲するが、一方で更なる高みを目指すために、重視すべき対象を〈類型〉の弁別と〈相違点〉の認識から、その多様な類型の間に埋もれている〈共通要素〉の抽出にシフトさせてみたい。

その理由は２つある。１つは、時代の流れや地域の広がりの中にありながら、手を替え、品を替えて繰り返し表現される〈共通要素〉にこそ、初期土偶の根本的性質が隠されていると考えるからである。

そしていま１つは、その〈共通要素〉から読み取れた根本的性質の共有と継承に着目することで、展開過程も更に意味ある形で復元できると考えるからである。

このような観点から、本稿では繰り返し表現される〈共通要素〉を重視し、検討を進めることにしたい。

なお、扱う資料の総数は89点である。本来の出土数はこれを上回るが、部分的な細かい破片試料は本稿の論点に照らして適していないので、今回は省く。時期区分は表１に基づく。対象とした資料の出典や出土遺跡、所在地、帰属する類型等については表２にまとめた。それぞれの資料は図５・６に図示した。表２および図４～８における資料番号は全て共通するものとして付した。



乙類においては、どの類型を見ても、その胴部上端中央（＝▽）に、穴や凹み、空白部によって〈満たされていない空間〉が用意されている。これこそが手を替え、品を換えながら繰り返し表現され続けていた〈共通要素〉である。

図１　初期土偶の類型と乙類の〈共通要素〉

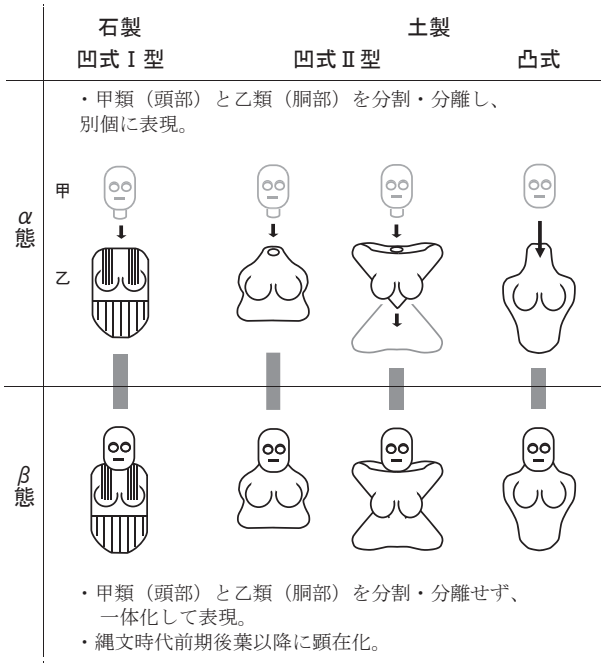


図２　土偶とその関連資料の様態

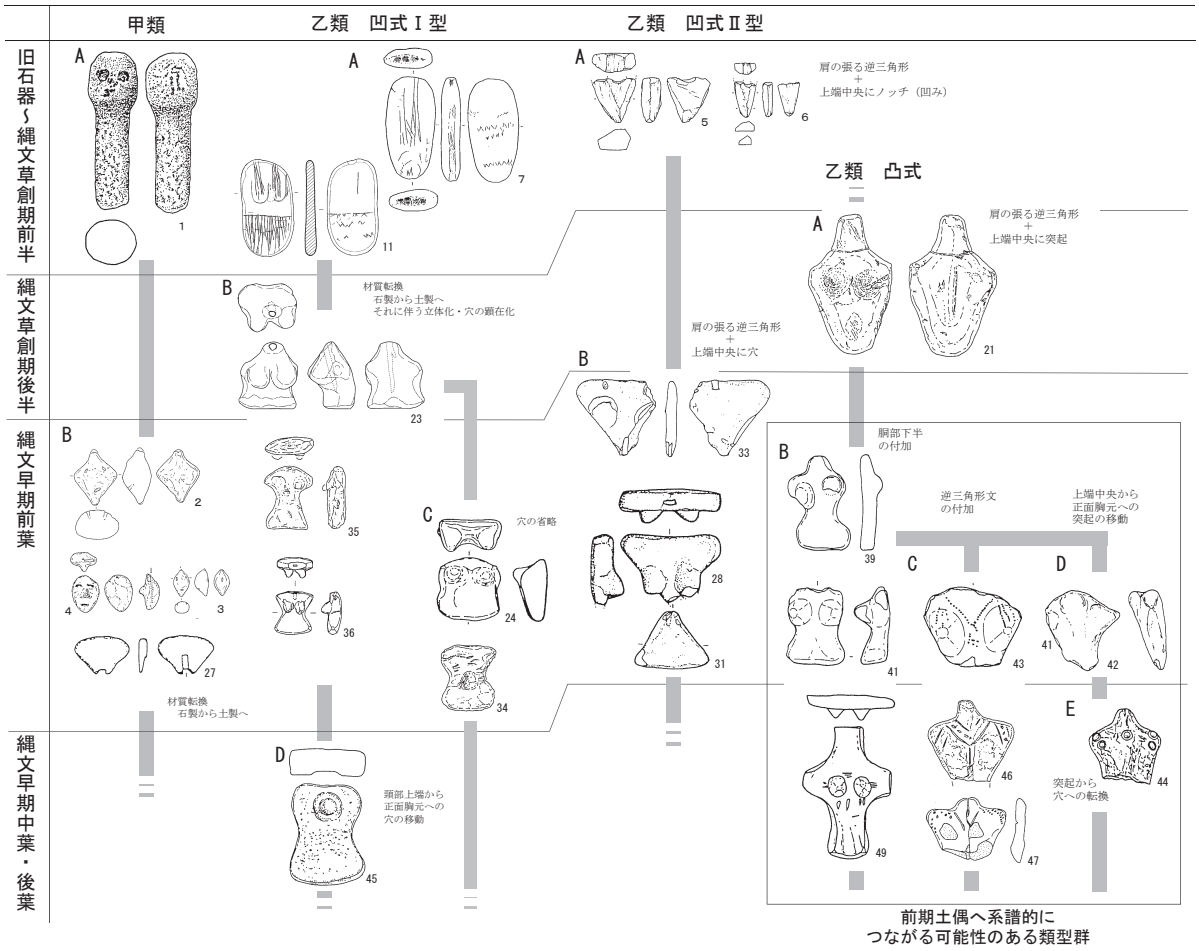


図３　初期土偶の展開過程

２．本論

（１)前期土偶の類型

類型化における着目点　初期土偶を対象とした前稿（瀬口2015）では、前期土偶へ系譜的につながる可能性がある類型として、乙類凸式のＢ・Ｃ・Ｅを挙げていた（図３右下)。ここでは、これらを前期土偶につながるプロトタイプと位置付け、これを起点にした類似配列＝組列を設けて、類型の内容と展開を整理してみたい。

なお、頭部を中心としたパーツである甲類は、前期においてはほぼ具象化されていない。よって、この段階の甲類は潜在化していたものと見なしておく。この点の詳細については別稿で改めて触れることとし、以下、当該期における造形対象の中心であった乙類について整理を進める。

類型とその組列の一覧は、図４のとおりである。

乙類凸式Ｂの展開　初期土偶における乙類凸式Ｂは、正面形がバイオリン形もしくは十字形を呈するもので、胴部上端の突出部に空白部を設けるものを基本としていた。これに類する前期土偶としてはＢ１があり、これを起点にしてＢ２やＢ３が続く組列を設定できる。

【Ｂ１】　早期の乙類凸式Ｂと大きな相違がなく、ほぼそのままのものである。典型例は埼玉県井沼方遺跡の資料で、前期前葉の関山式期のものである（図4-3)。前期の前葉～後葉に類例が見られる。

【Ｂ２】　Ｂ１に類似するが、左右で対になる円孔が胴部に付加される点で異なる。典型例は岩手県塩ヶ森遺跡の資料である（図4-12)。該当事例は、いずれも前期後葉以降に確認されるもので、Ｂ１に後出する類型だと見て取れる。

【Ｂ３】　Ｂ２に類似するが、左右で対になる円孔が胴部上端の突出部にも付加される点で異なる。典型例は、群馬県城遺跡の資料である（図4-15)。該当事例は、いずれも前期後葉以降に確認されるもので、この点をもってＢ１より後出するものだと見て取れる。

乙類凸式Ｃの展開　初期土偶における乙類凸式Ｃは、Ｂと同様に、正面形がバイオリン形もしくは十字形を呈するもので、胴部上端の突出部に空白部を設けるものを基本とする。最大の特徴は、その胸部にＶ字文が付加されることで、この点においてＢと異なる。これに類する前期土偶としてはＣ１・Ｃ２の細分類型があり、Ｃ１を起点にしてＣ２が続く組列を設定できる。

【Ｃ１】　早期の乙類凸式Ｃと大きな相違がなく、ほぼそのままのものである。典型例は、茨城県前谷西遺跡から出土した前期中葉の資料である（図4-17)。

【Ｃ２】　Ｃ１に類似するが、左右で対になる円孔が胴部に付加される点で異なる。典型例は岩手県塩ヶ森遺跡の資料である。事例は前期後葉のものに限られ、この点をもってＣ１より後出するものだと見て取れる（図4-18)。

乙類凸式Ｅの展開　初期土偶における乙類凸式Ｅは、Ｂ・Ｃと同様に、正面形がバイオリン形もしくは十字形を呈するもので、胴部上端の突出部に空白部を設けるものを基本とする。最大の特徴は、その正面胸部に凹みが設けられ、そこに左右で対になる円孔が付加されることで、この点においてＢ・Ｃと異なる。

この類型は、前期になると多様な展開を見せ、Ｅの流れのほかに、これを起点にしてＦ・Ｇ・Ｈが派生している。このうち、前期土偶におけるＥの流れとしては、Ｅ１を起点にしてＥ２・Ｅ３が続く組列を示しえる。

【Ｅ１】　早期の乙類凸式Ｅと大きな相違がなく、ほぼそのままのものだが、左右で対になる円孔が刺突から穿孔によるものへ置換されている点で異なる。典型例は、宮城県糟塚遺跡から出土した前期中葉の資料などで（図4-19)、前期後葉にかけて事例が認められる。

【Ｅ２】　Ｅ１に類似し、正面胸元に凹みを設けるが、左右で対になる円孔が省略されている点で異なる。プロトタイプである初期土偶の乙類凸式Ｅと同様に、左右で対となる円孔をもつＥ１が型式学的には先行し、その円孔が省かれたＥ２は後出するものとして位置付けられる。典型例は、宮城県糟塚遺跡の資料などで（図4-33・38)、前期中葉から後葉の事例が認められる。

【Ｅ３】　Ｅ２に類似するが、左右で対になる円孔が胴部上端の突出部にも転用・付加されている点で異なる。典型例は、岩手県塩ヶ森遺跡の資料などである（図4-54)。前期後葉以降に現れるもので、中葉に遡る例は確認されない。この点をもってＥ２より後出するものだと見て取れる。

乙類凸式Ｆの展開　凸式Ｅと同様に正面中軸線上に凹みを設け、左右で対になる円孔を付加するものである。最大の特徴は、その凹みが胸部ではなく胴部上端の突出部に設けられていることで、この点でＥと異なる。

Ｅ１と同様に前期中葉に現れたものだが、プロトタイプである初期土偶の乙類凸式Ｅとほぼ同じ形態のＥ１が型式学的には先行し、胸部の凹みが胴部上端の突出部へ転移しているＦ１は後出するものとして位置付けられる。Ｆ１を起点にしてＦ２・Ｆ３が続く組列を設定できる。

【Ｆ１】　前期中葉以降に事例が確認できる。典型例としては、青森県白座遺跡（図4-57：前期中葉）や岩手県滝の沢遺跡（図4-58：前期後葉）の資料がある。

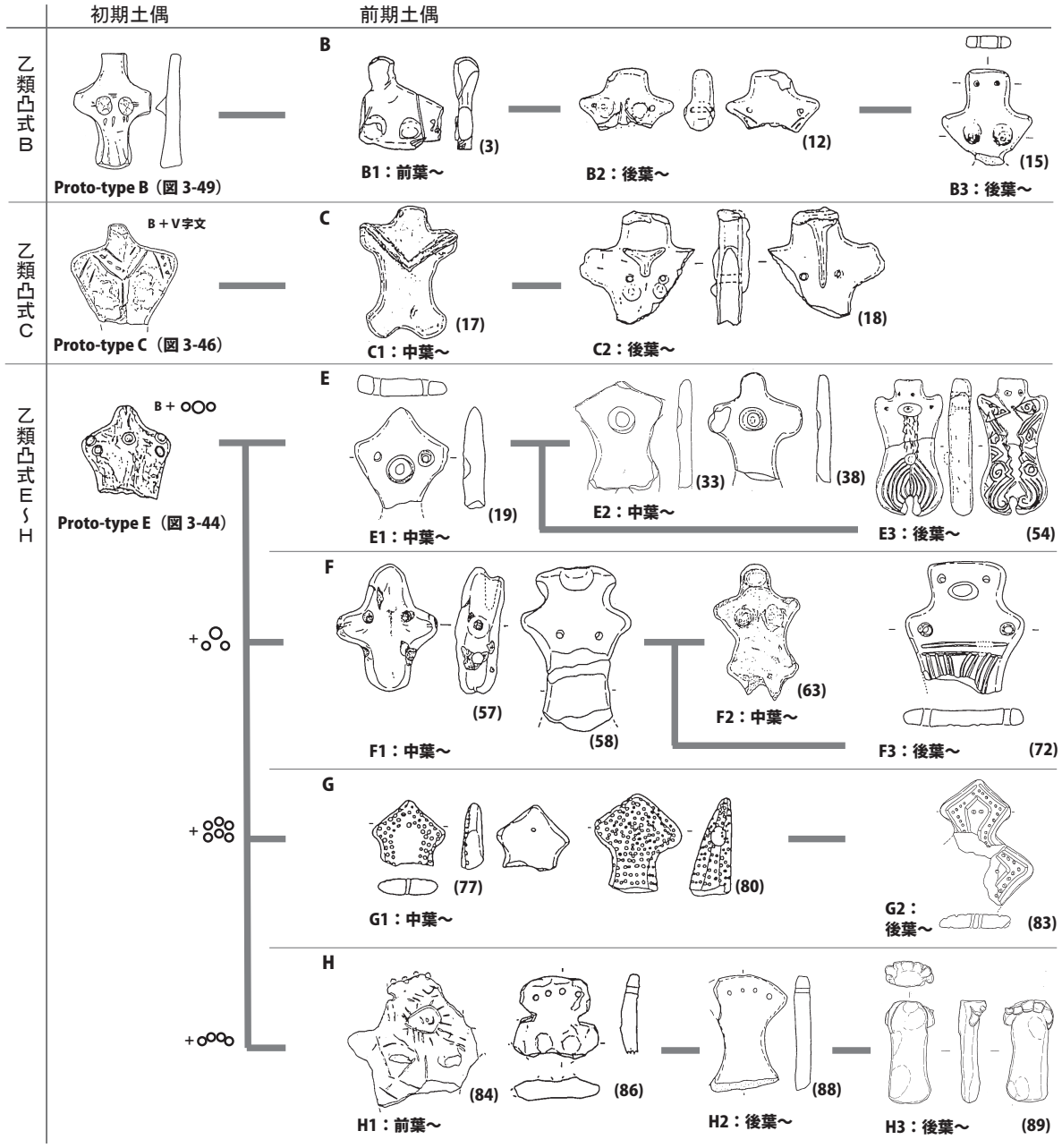
【Ｆ２】　Ｆ１に類似するが、左右で対になる円孔が省略される点で異なる。典型例は、岩手県杉則遺跡の資料である（図4-63)。Ｆ１と同じく前期中葉に現れたものだが、プロトタイプである初期土偶の乙類凸式Ｅと比較したとき、左右で対になる円孔をもつＦ１が型式学的には先行し、その円孔が省かれたＦ２は後出するものとして位置付けられる。

【Ｆ３】　Ｆ１に類似するが、左右で対になる円孔が胴部上端の突出部にも転用・付加されている点で異なる。典型例は、宮城県大膳館遺跡の資料である（図4-72)。前期後葉に現れたもので、Ｆ１・Ｆ２より後出する。

表１　時期区分

※地域間の並行関係はおおよそのものとする。

時期		関西	北陸	中部	関東	南東北	北東北
前期	前葉	羽島下層Ⅰ	極楽寺	中越・神ノ木	花積下層	上川名	早稲田6類／表館
					関山	大木1	
	中葉	羽島下層Ⅱ	朝日C	有尾・黒浜	黒浜	大木2	深郷田
		北白川下層Ⅰa					
		北白川下層Ⅰb					円筒下層a・b
		北白川下層Ⅱa	福浦下層	諸磯a	諸磯a	大木3	
	後葉	北白川下層Ⅱb	蜆ヶ森	諸磯b	諸磯b／浮島	大木4	円筒下層c・d
		北白川下層Ⅱc					
		北白川下層Ⅲ	福浦上層・朝日下層	諸磯c	諸磯c／興津	大木5	
		大歳山		十三菩提	十三菩提	大木6	
中期		船元Ⅰ	新保	梨久保	五領ヶ台	大木7a	円筒上層a



※図中の番号は表２ならびに図５以降の番号と共通する。

図４　前期土偶の類型と組列

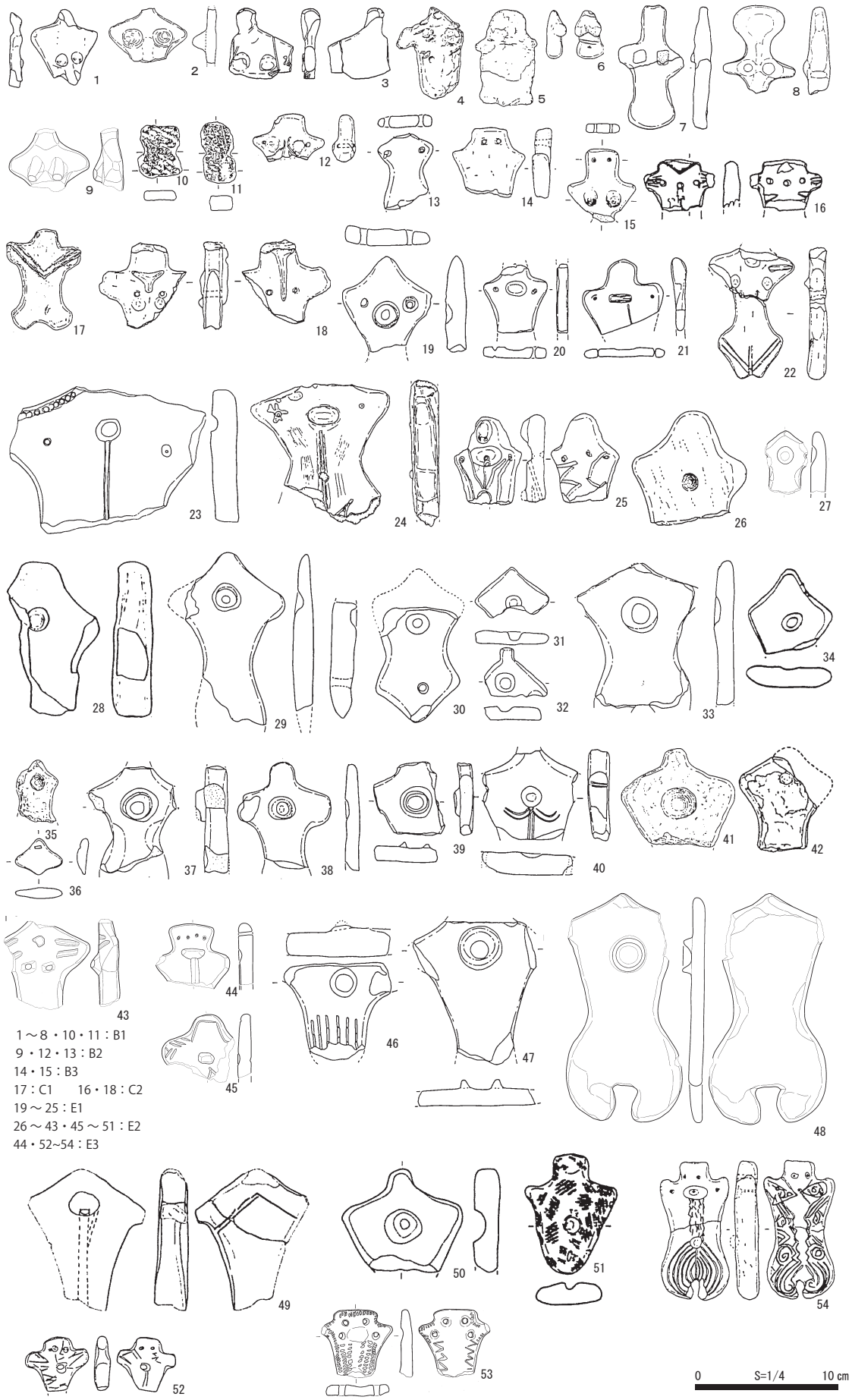

1～8・10・11：B1
9・12・13：B2
14・15：B3
17：C1　16・18：C2
19～25：E1
26～43・45～51：E2
44・52~54：E3
0　S=1/4　10 cm

図５　前期土偶実測図（１）

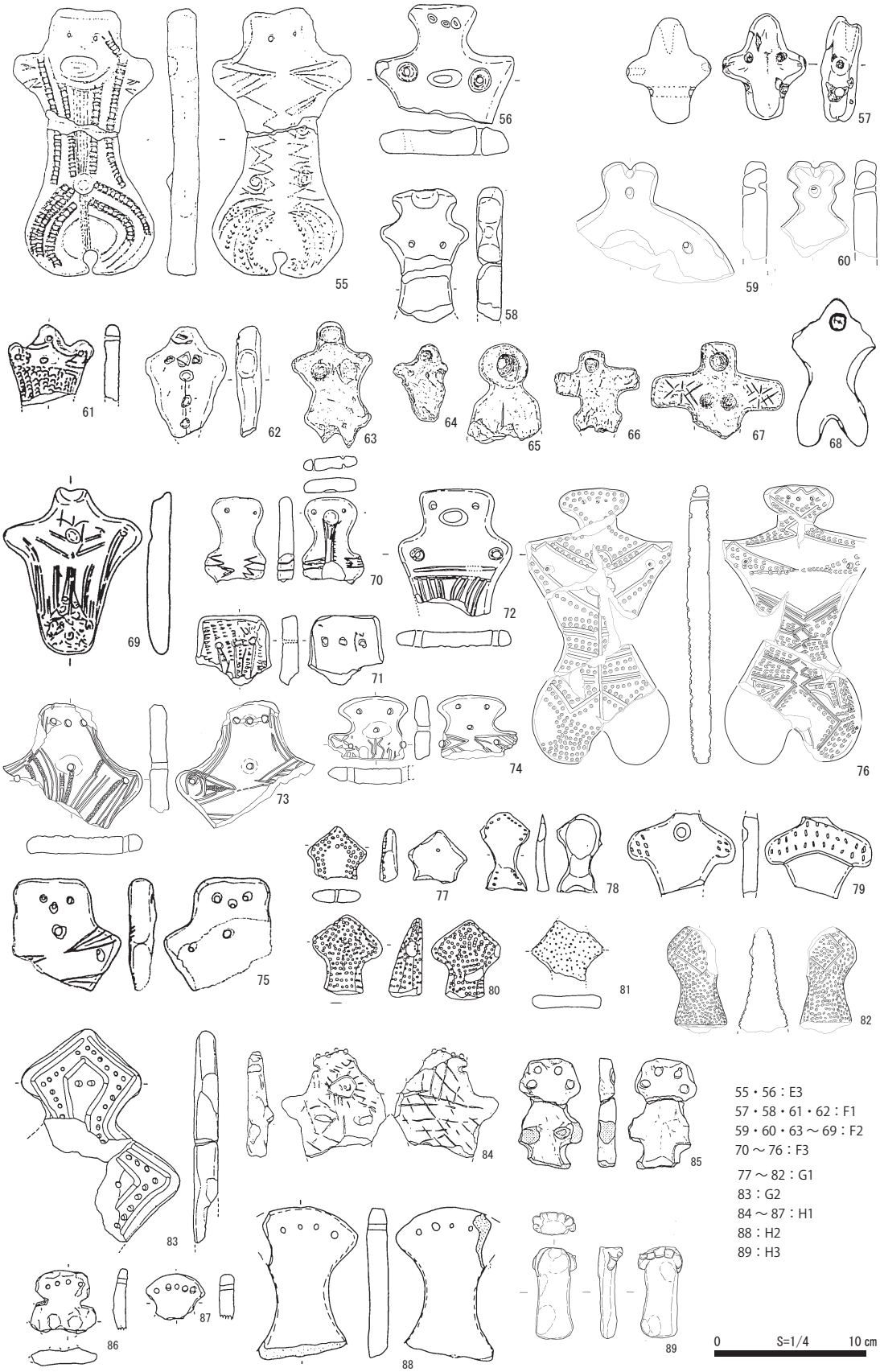

55・56：E3
57・58・61・62：F1
59・60・63～69：F2
70～76：F3
77～82：G1
83：G2
84～87：H1
88：H2
89：H3
0 S=1/4 10 cm

図６　前期土偶実測図（２）

乙類凸式Ｇの展開　先行する凸式Ｅと同様に円孔を加えるが、その円孔を全面的かつ多重に加えている点で異なる。細分類型としてはＧ１・Ｇ２があり、Ｇ１を起点にしてＧ２が続く組列を設定できる。

【Ｇ１】　凸式Ｅに類似するが、左右で対となる円孔が多重刺突文に置換されている点で異なる。典型例は、宮城県糟塚遺跡の資料である（図4-77）。前期中葉に現れる。

【Ｇ２】　Ｇ１に類似するが、左右で対になる円孔が胴部上端の突出部に付加されている点で異なる。典型例は、岩手県滝の沢遺跡の資料である（図4-83）。前期後葉以降に現れたもので、Ｇ１より後出する。

乙類凸式Ｈの展開　最後は乙類凸式Ｈの流れである。先行する凸式Ｅと同様に円孔を加えるが、胴部上端の突出部を縁取るように列状に配されている点で異なる。ネガティブな円孔が、ポジティブな粘土粒に置換されたものもここでは含み、Ｈ１を起点にしてＨ２・Ｈ３が続く組列を設定できる。

【Ｈ１】　前期前葉に現れたものである。典型例は、前期前葉に位置付けられる千葉県石揚遺跡の資料である（図4-84）。

【Ｈ２】　Ｈ１に類似するが、胴部上端が肥大化している点で異なる。典型例は、群馬県黒熊第５遺跡の資料である（図4-88）。前期後葉以降に現れたもので、Ｈ１より後出する。

【Ｈ３】　典型例は、山梨県桂野遺跡の資料である（図4-89）。Ｈ２に類似するが、その胴部上端の突出部に奥行きを設けることによって頂部を皿状に作り出し、立体化させている点で異なる。また縁辺に配されるネガティブな円孔列が、ポジティブな粘土粒列に置換されている点でも異なる。Ｈ２と同じく前期後葉に現れているが、先行するＨ１と同様に平板な形状で、ネガティブな円孔を用いるＨ２が型式学的には先行し、より立体的でポジティブな粘土粒を用いるＨ３は後出するものとして位置付けられる。

（２）前期土偶の展開過程

展開過程から読み取れる共通要素　以上、多様な表現方法で造形されていた前期土偶をＢ・Ｃ・Ｅ～Ｈに分類しながら、その展開を整理した。これをまとめると図７・８のような展開過程が見出せるだろう。

本節では、この展開過程の中から、手を替え、品を換えながら、共時的かつ通時的に繰り返されている〈共通要素〉のあり方を改めて観察し、前期土偶の根本的性質とその移ろいについて理解を深めたい。

従来の土偶論において、しばしば注目されてきた要素は乳房や妊娠の表現である。しかし、先にも述べたように、前期土偶におけるその出現率は低く、必ずしも第一義的に注目すべき要素とは言えない。

一方、初期土偶を扱った前稿では、胴部上端中央付近に用意されていた〈満たされていない空間〉こそ、全ての資料にわざわざ設けられていた注目すべき〈共通要素〉だと指摘した。そこでここでは、前期土偶における〈満たされていない空間〉の継承に焦点を当て、検討を進めることにする。

まず、初期土偶の乙類凸式ＢやＣをプロトタイプとし、これを起点とする系譜を対象として観察したい。前期の細分類型としては、Ｂ１・Ｂ２・Ｃ１・Ｃ２等が相当する。ポイントは、いずれも胴部上端の突出部にわざわざ空白部を残す点、また、それにより〈満たされていない空間〉を創出している点であり、初期土偶で幾度も繰り返されてきた〈共通要素〉がそのまま継承されていると見てよい。

初期土偶の乙類凸式Ｅをプロトタイプとし、これを起点とする前期のＥ１やＥ２でも、正面胴部上半の胸元周辺に凹みがわざわざ繰り返し表現され続けている。したがって、ここでも凹みによって象徴される〈満たされていない空間〉が〈共通要素〉として継承されていると見てよい。

同様に前期のＦ１・Ｆ２でも、胴部上端の突出部もしくはその上端に凹みをわざわざ繰り返し表現し続けている。また、Ｇ１・Ｈ１～３では、多重に施された細かい穴そのものや、胴部上端の突出部を縁取るように配された円孔・粘土粒列によって、空白部を作り出し、〈満たされていない空間〉を繰り返し表現し続けている。これらの類型でも〈共通要素〉の継承は認められるだろう。

以上のように、初期土偶の段階に成立した〈共通要素〉は様々な表現方法を用いながら前期にも継承されている。これらは、いずれも〈未だ満たされていない状態＝α態〉として造形されており、〈満たされることを待つ器〉を象徴するという初期土偶の根本的性質もまた継承されていることを強調しておきたい。

前期後葉に現れた様態の多様化　しかし一方で、前期後葉には画期的な変化も見出せそうだ。この点については、議論の糸口を原田昌幸氏が既に用意してくれている。この時期には東北地方で簡単な刺突表現を胴部上端の突出部に加えた例が現れる。同じ頃、中部地方でも円孔表現を胴部上端の突出部に加えたものが見出せる。氏はこれらをもって、「抽象の域を出ない」が「縄文世界最初の、“顔”の表現の始まり」だと説いた（原田1995、P24）。

原田氏の指摘事項のうち、東北地方における現象の理解を深めるには、本稿における乙類凸式Ｂ３・Ｅ３・Ｆ３・Ｇ２の出現過程に焦点を当てる必要があるだろう。先行類型からの流れに目を配るならば、原田氏が指摘する顔表現の出現とは、正面胸元へ施されていた左右で対になる円孔が、胴部上端の突出部へ転用・付加された結果であることにほかならない。前期における両目もしくは両目＋口からなるように見える顔表現とは、東北地方の場合、上記のような流れの中で生まれたものである。

一方、中部地方のあり方に関しては注意が必要である。この議論に関連する資料としては、本稿におけるＨ１・Ｈ

No.	遺跡名		時期		分類	備考			出典
			大別	細分					
1	岩手	鳩岡崎	前期前葉	前期初頭	B1				相原・鈴木ほか1982
2	宮城	大木囲貝塚	前期前葉	大木1	B1				七ヶ浜町教委1978・1979
3	埼玉	井沼方	前期前葉	関山	B1	●			青木・岩井・小倉1980、青木1987、新屋・笹森1990
4	埼玉	大古里	前期前葉	花積下層	B1	●			町田市立博物館1996
5	東京	四枚畑		諸磯	B1	●			坂詰・江坂1938
6	埼玉	松木	前期後葉	諸磯b	B1	●			青木・中村ほか1994
7	群馬	八幡山		諸磯	B1	●			鬼形1973
8	群馬	谷地	前期後葉	諸磯b～c	B1	●			前原1982
9	宮城	嘉倉貝塚	前期後葉	大木5・6	B2		○		宮城県教委2003
10	山梨	花鳥山	前期後葉	諸磯b～c	B1	●			長沢1989
11	山梨	花鳥山	前期後葉	諸磯b～c	B1	●			長沢1989
12	岩手	塩ヶ森	前期後葉	大木5～6	B2		○		本沢1982、東北歴史資料館1996
13	宮城	糟塚	前期後葉	大木5～6	B2		○		築館町史編纂委員会1976
14	岩手	塩ヶ森	前期後葉	大木5～6	B3		○	β	本沢1982、東北歴史資料館1996
15	群馬	城	前期後葉	諸磯b	B3	●	○	β	内田1981
16	岩手	鳩岡崎上ノ台	前期後葉		C2		○		長田2009
17	茨城	前谷西	前期中葉	浮島	C1	●			瓦吹1994
18	岩手	塩ヶ森	前期後葉	大木5～6	C2		○		本沢1982、東北歴史資料館1996
19	宮城	糟塚	前期中葉	大木3	E1		○		築館町史編纂委員会1976
20	岩手	滝の沢	前期後葉	大木5～6	E1		○		北上市教委
21	岩手	滝の沢	前期後葉	大木5～6	E1		○		北上市教委
22	岩手	塩ヶ森	前期後葉	大木5～6	E1		○		本沢1982、東北歴史資料館1996
23	宮城	倉崎貝塚	前期後葉	大木5～6	E1		○		迫町市編纂委員会1981
24	宮城	網場貝塚	前期後葉	大木5～6	E1		○		米山町史編纂委員会1974
25	岩手	元御所Ⅰ	前期後葉	大木6	E1		○		岩手県埋文センター1982
26	青森	畑内	前期中葉	円筒下層a	E2				「土偶とその情報」研究会1994、鈴木1994
27	宮城	嘉倉貝塚	前期後葉	大木5・6	E2				宮城県教委2003
28	秋田	上ノ山Ⅱ	前期中葉	大木2b	E2				秋田県埋文調査センター1988
29	宮城	糟塚	前期中葉	大木2～3	E2				築館町史編纂委員会1976
30	宮城	糟塚	前期中葉	大木2～3	E2				築館町史編纂委員会1976
31	宮城	糟塚	前期中葉	大木3	E2				築館町史編纂委員会1976
32	宮城	糟塚	前期中葉	大木3	E2				築館町史編纂委員会1976
33	宮城	糟塚	前期中葉	大木3	E2				築館町史編纂委員会1976
34	岩手	樺山	前期中葉～後葉	大木3～5	E2				北上市1968、北上市教委1969
35	宮城	泉		大木	E2				東北歴史資料館1996
36	群馬	城	前期後葉	諸磯b	E2	●			内田1981
37	宮城	糟塚	前期後葉	大木4	E2				築館町史編纂委員会1976
38	宮城	糟塚	前期後葉	大木2～4	E2				築館町史編纂委員会1976
39	宮城	糟塚	前期後葉	大木2～4	E2				築館町史編纂委員会1976
40	宮城	糟塚	前期後葉	大木5	E2				築館町史編纂委員会1976
41	山形	高瀬山	前期後葉	大木4～5	E2				山形県埋文センター1995
42	石川	真脇	前期後葉		E2	●			能都町教育委員会1986
43	宮城	嘉倉貝塚	前期後葉	大木5・6	E2				宮城県教委2003
44	宮城	嘉倉貝塚	前期後葉	大木6	E3		○	β	宮城県教委2003
45	宮城	嘉倉貝塚	前期後葉	大木5・6	E2				宮城県教委2003
46	宮城	糟塚	前期後葉	大木5～6	E2				築館町史編纂委員会1976
47	宮城	糟塚	前期後葉	大木2～4	E2				築館町史編纂委員会1976
48	宮城	嘉倉貝塚	前期後葉	大木5	E2				宮城県教委2003
49	岩手	新田	前期後葉		E2				長田2009
50	山形	高瀬山	前期後葉		E2				長田2009
51	青森	沢ノ黒	前期後葉	円筒下層d	E2				長田2009
52	岩手	滝の沢	前期後葉	大木5～6	E3		○	β	北上市教委
53	岩手	高畑	前期後葉		E3		○	β	岩手県埋文センター2004
54	岩手	塩ヶ森	前期後葉	大木5～6	E3		○	β	本沢1982、東北歴史資料館1996
55	岩手	塩ヶ森	前期後葉	大木5～6	E3		○	β	本沢1982、東北歴史資料館1996
56	宮城	糟塚	前期後葉	大木5～6	E3		○	β	築館町史編纂委員会1976
57	青森	白座	前期中葉	円筒下層a	F1		○		杉山ほか1989
58	岩手	滝の沢	前期後葉	大木5～6	F1		○		北上市教委
59	宮城	嘉倉貝塚	前期後葉		F2				宮城県教委2003
60	宮城	嘉倉貝塚	前期後葉		F2				宮城県教委2003
61	岩手	煤孫	前期後葉		F1		○		長田2009
62	岩手	塩ヶ森	前期後葉	大木5～6	F1		○		本沢1982、東北歴史資料館1996
63	岩手	杉則	前期中葉	大木2b	F2				斉藤1985
64	宮城	小浦	前期前葉～中葉	大木1～2	F2				楠本ほか1973
65	福島	八万館		大木	F2				東北歴史資料館1996
66	福島	八万館		大木	F2				東北歴史資料館1996
67	福島	宇輪台		大木	F2				東北歴史資料館1996
68	山梨	一の沢	前期後葉	諸磯b	F2	●			小林・里村1989
69	青森	三内丸山	前期後葉	円筒下層d	F2				長田2009
70	宮城	糟塚	前期後葉	大木5～6	F3		○	β	築館町史編纂委員会1976
71	岩手	下長谷地	前期後葉	大木6～	F3		○	β	岩手県埋文センター1982
72	宮城	大膳館跡	前期後葉	大木5～6	F3		○	β	伊東ほか1981、東北歴史資料館1987
73	岩手	高畑	前期後葉		F3		○	β	岩手県埋文センター2004
74	岩手	高畑	前期後葉		F3		○	β	岩手県埋文センター2004
75	岩手	大中田	前期後葉		F3		○	β	長田2009
76	宮城	嘉倉貝塚	前期後葉		F3		○	β	宮城県教委2003
77	宮城	糟塚	前期中葉	大木3	G1				築館町史編纂委員会1976
78	宮城	糟塚	前期中葉	大木3	G1				築館町史編纂委員会1976
79	宮城	糟塚	前期後葉	大木4	G1				築館町史編纂委員会1976
80	宮城	大木囲貝塚	前期後葉	大木5	G1				小笠原1984
81	宮城	沼崎山	前期後葉	大木5	G1				遊佐ほか1980
82	宮城	嘉倉貝塚	前期後葉		G1				宮城県教委2003
83	岩手	滝の沢	前期後葉	大木5～6	G2		○	β	北上市教委
84	千葉	石揚	前期前葉	花積下層	H1	●			太田・安井1994
85	山梨	釈迦堂	前期中葉	黒浜	H1	●			新津・小野1983、小野ほか1987
86	愛知	大曲輪貝塚	前期後葉	北白川下層Ⅱ式	H1	●			見晴台考古資料館1981、伊藤・川合1993
87	愛知	大曲輪貝塚	前期後葉	北白川下層Ⅱ式	H1	●			見晴台考古資料館1981、伊藤・川合1993
88	群馬	黒熊第5	前期後葉	諸磯c	H2	●			茂木1983・1988
89	山梨	桂野	前期後葉		H3	●			市川1999A

備考：●＝関東地方以西　○＝左右で対となる円孔　β＝β態

表２　対象資料一覧

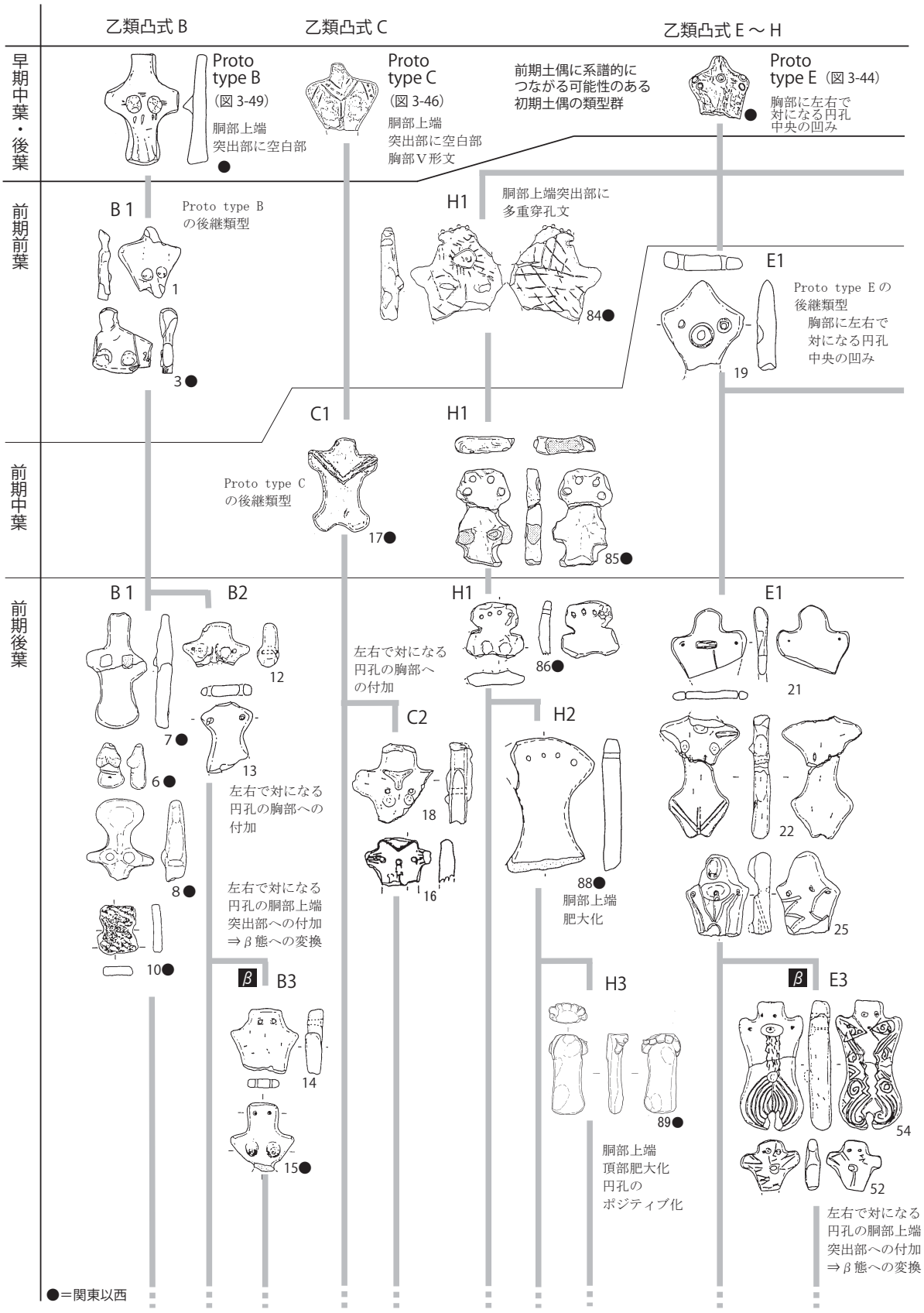


図７　前期土偶の展開過程（１）

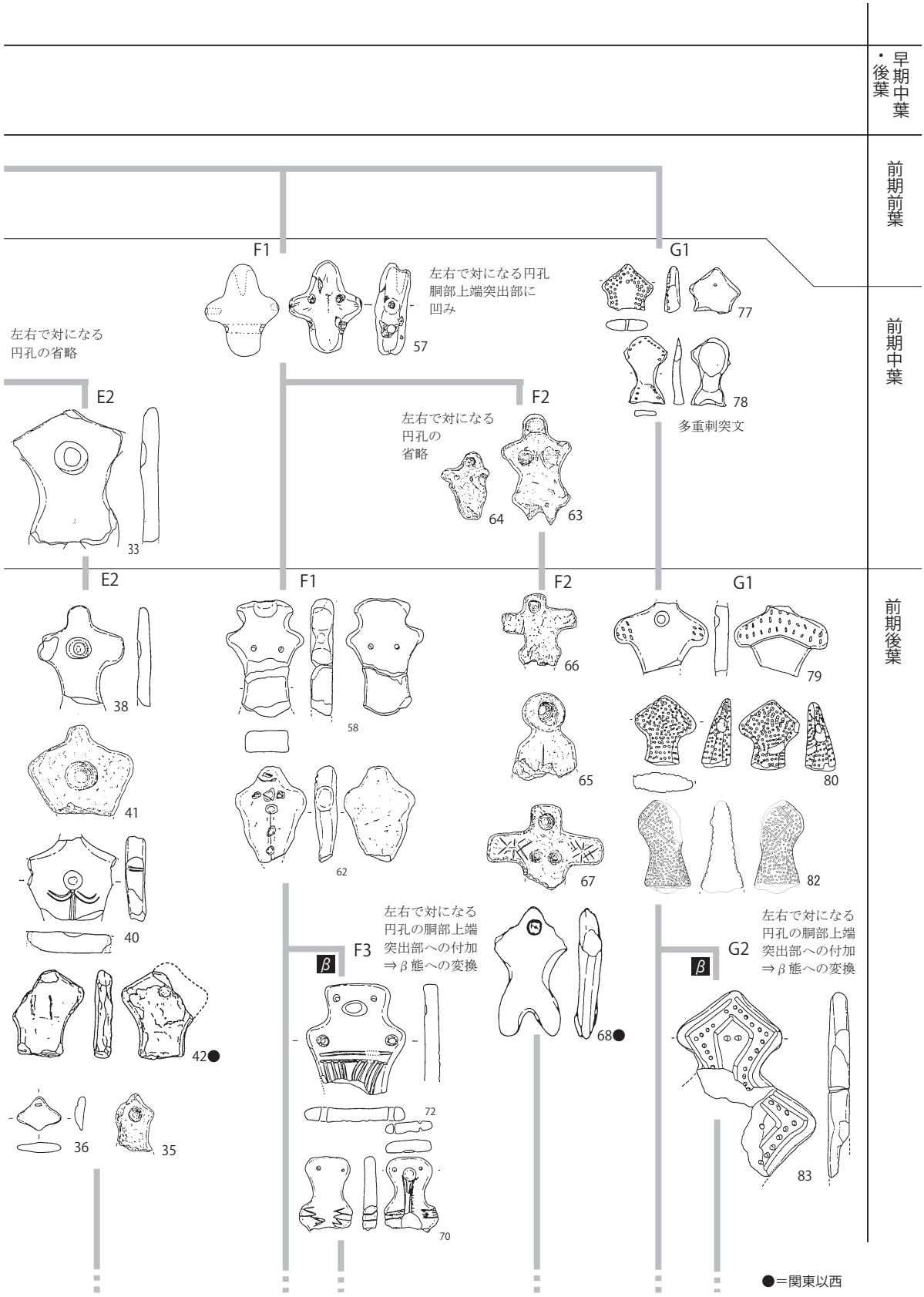


図８　前期土偶の展開過程（２）

２が相当する。この中には目などを表現しているように見える資料も確かにある（図7-85・86）。しかし、図７の84から85・86を経て、88・89に至る流れを踏まえるならば、これらの円孔列は〈胴部上端の突出部を縁取る〉ことを意識して継承されているのであって、目などの表現を意図したものではないことが理解されよう。したがって、顔表現の出現に関する議論から、ここではこれを除外しておきたい。

ともあれ、本稿の論点と照らし合わせた場合、議論のポイントとして改めて浮上してくるのは、この顔表現の出現が示唆する意味だが、それは土偶の様態の多様化、すなわち土偶の根本的性質の多様化にほかならない。

ここまで見てきたように、初期土偶が成立してから前期中葉まで、乙類の胴部上端中央には〈満たされていない空間〉が用意され続けてきた。しかし、それが満たされ、β態として具象化されることは決して見られなかった。この段階までの土偶造形の意図は〈満たされることを待つ器＝α態〉の具象化に絞られていたのであり、β態を具象化する意図は皆無だったといえる。

前期後葉における顔表現の出現は、そのあり方の変容を示唆するものである。この段階に出現した乙類凸式Ｂ３・Ｅ３・Ｆ３・Ｇ２には、胴部上端中央の空白部に朧気ながらも顔表現が挿入されている。これは、単に顔表現が出現したことだけを意味するものではない。決して表されることのなかったβ態の出現をも意味するものであり、それまで顕在化することのなかった造形意図の発露を示唆するものである。α態としての土偶が〈満たされることを待つ器〉の象徴であるならば、β態とは、何者かによって〈満たされた器〉を象徴するものである。意識的か、あるいは無意識のうちにかはさておき、その具象化の兆しが前期後葉に始まったことを、ここで改めて指摘しておきたい。

ただし、この段階におけるβ態の出現はα態からの代替を意味するものではない。前期後葉以降もまた、α態の具象化は続くことに目を配る必要がある。前期後葉のこの画期的変化とは、α態からβ態への移行ではなく、α態で表現されてきた世界にβ態が付加されたものとして捉えるべきだ。そういった意味で、この変化は土偶の様態の多様化、すなわち根本的性質の多様化として位置付けられよう。

様態の構成に見る地域的差異　β態出現の実態を理解する上で、目を配るべきもう１つの事項として地域的差異がある。表２の資料一覧を用いながら状況を整理したい。

前期土偶の主要な分布域は２つある。１つは東北地方を中心としたエリアであり、いま１つは関東・中部地方を中心としたエリアである。表２の備考欄のうち、関東・中部地方を中心としたエリア――関東地方以西――の資料には「●」を配した。また、左右で対になる円孔が配された資料には「○」を配し、β態を具象化したものには「β」と記した。

これらの表示を俯瞰したとき、β態出現に関わる地域的差異もまた明らかとなろう。注目すべきことは、左右で対となる円孔が関東地方以西ではほとんど採用されず、群馬県城遺跡の１例（表2-15）に留まる点、それと相関するようにβ態もまたこのエリアでは発露していない点である。

この差異の背景については、既に一部推察したところだが、東北地方を中心としたエリアにおいて、左右で対となる円孔が早くから採用され、両目の表現に転用されやすい土壌がそもそも存在していたことは重要である。それが故に、このエリアではいち早くβ態具象化への一線を越えたと推察される。

一方、関東・中部地方を中心としたエリアでは、左右で対となる円孔はもともと多用されておらず、それを転用する形でのβ態の具象化もまた進まなかった。以上が様態の構成に見る地域的差異――β態出現に関わる地域的差異――が生じた背景だと推察される[(5)]。

３．結論と展望

（１）結論

初期土偶を扱った前稿では、胴部上端中央付近に〈満たされていない空間〉を用意することが〈共通要素〉であり、〈未だ満たされていない姿＝α態〉の具象化こそが初期土偶における主な造形意図だったことを見出した。そして、この点をもって、初期土偶の根本的性質とは〈満たされることを待つ器〉を象徴するところにある、と論じた。

本稿では、〈前期土偶の根本的性質と展開過程〉を論点として検討を重ね、上記のような初期土偶のあり方、造形意図、根本的性質がどのように継承され、いかなる変容を見せたのか、といった点を問うた。以下、その結論をまとめたい。

作業においてまず注目したのは、前期土偶における類型の内容と展開である。その展開過程の中から、手を替え、品を換えながら、共時的かつ通時的に繰り返された〈共通要素〉を改めて確認し、根本的性質とその移ろいの理解へと駒を進めた。結果、初期土偶と同様に、胴部上端中央付近に〈満たされていない空間〉を用意し、α態として具象化するあり方は広く共有されていることを確認した。この点から見て、初期土偶のあり方は前期土偶に明確に引き継がれ、その造形意図や根本的性質もまた継承されていると結論付けられる。

その一方で、前期後葉には画期的な変化――顔表現の出現――が新たに加わり、それまで決して具象化されることのなかったβ態が造形され始めていた。α態と対比したとき、β態とは何者かによって〈満たされた器〉を象徴するものとして位置付けられる。α態に併せてこのβ態が付加されたことにより、土偶の様態の多様化、根本的性質の多様化といった変容が生じたと結論付けられる。

ただし土偶に関して言えば、このβ態は、東北地方を中

心としたエリアでは具象化されたが、もう１つの主たる分布地である関東・中部地方を中心としたエリアでは具象化が進んでいない。このことから、上記の多様化という変容には地域的差異があることも結論付けられる。

（２）展望

今後の展望として２点を挙げたい。

１つは時期的な空白期に対する評価である。かつて原田昌幸氏は、東北地方における土偶型式の系譜とその空白期に対して問題を提起し、前期土偶の系譜が早期まで遡るかどうかについては、期待を持ちながらも断言はできないと説いた（原田1997）。たしかに早期後葉の資料は寡少であり、また、本稿の図７・８で明らかなように前期前葉の資料もごく少なく見える。

本稿では早期から前期の継続性を敢えて強調する形で論じたところだが、この点に関しては、実体を伴う〈技術・モノの伝承レベル〉と、実体を必ずしも伴わない〈口承レベル〉とに弁別し、両者の関係性を整理しながら検討し直す必要がありそうだ。ポイントは、空白期を挟んでもなお〈共通要素〉がよく継承されている点だろう。いずれにしろ、込み入った内容になることが想定されるし、中期末から後期への移行期や、西日本における土偶のあり方とも深く関わりそうなので、この件については稿を改めて論じ直したい。

いま１つは前期土偶から中期土偶への展開である。この点に関しては、小林康夫氏や原田昌幸氏、今福利恵氏や市川恵子氏達が稔り豊かな成果を蓄積している（小林1997、原田1998、今福1998・2000、市川1999A・Bほか）。

一方、筆者自身もまた中期土偶におけるβ態の本格的な顕在化に着目し、それに関わる現象を整理してきた（瀬口2013A・B、2014）。そこでは、再び顕在化した甲類によって〈満たされた器〉が広く具象化され、手を替え、品を換えながら様々な姿で造形されており、今回整理した初期土偶からの流れとつながりが、次に解くべき重要課題の一つになっている(6)。先学の優れた成果を糧にしながら、この検討についても稿を改めて論じ直すことにしたい。

［謝辞］

本稿は、相谷熊原遺跡や粟津湖底遺跡をはじめとする県内遺跡から出土した土偶とその歴史的意義を明らかにしていくことを最終的な目的の１つとするものである。第272回近江貝塚研究会（2016年10月29日（土）開催）での研究発表を土台とし、参加者からの指摘・指導を重要な養分とした。関係各位に感謝します。

註

(1)原田昌幸氏は前期土偶を含めて初期土偶と定義しているが、ここでは本文のように区分して整理することにする。

(2)前稿で対象とした資料数は、甲類５点、乙類45点である。

(3)瀬口2015では、〈共通要素〉を〈基本構造〉と表記していたが、その後の検討に基づき、本文のように改めることとする。

(4)観察の理論負荷（ハンソン1958）の典型ともいえる。

(5)ただし、土器への顔面貼付にも目を向けた場合、その理解は更に広がる。この点についても稿を改めて論じたい。

(6)その際、特に注目すべき資料の１つはＨ３＝山梨県桂野遺跡例になるだろう。その特徴は、胴部上端の突出部に奥行きを設け、そのことによって頂部を皿状に作り出している点である。型式学的な流れから見て、その皿状の頂部は〈満たされていない空間〉そのものを意味するものと見てよい。一方、中期土偶の代表的な類型の１つは、頭頂部が皿状を呈する河童型土偶だが、原田・市川・今福の各氏らは、祖型としてこの桂野遺跡例を想定している（原田1998、市川1999Ｂ、今福2000ほか）。これらの点を踏まえるならば、中期の少なくとも一部の類型には、初期土偶以降のあり方が形を変えながらも継承されている可能性がある。この点も視野に入れながら検討を進めてみたい。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

相原康二・鈴木優子ほか（1982）「江釣子村鳩岡崎遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XV -2 岩手県教育委員会

青木義修・岩井重雄・小倉均（1980）「井沼方遺跡」『大間木内谷・和田西・吉場・井沼方遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会

青木義修（1987）「浦和市井沼方遺跡発見の土偶」『考古学ジャーナル』272 ニュー・サイエンス社

青木幸一・中村誠二ほか（1994）『松木遺跡』浦和市遺跡調査会

秋田県埋蔵文化財センター（1988）「上ノ山Ⅱ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書』

新屋雅明・笹森健一（1990）『埼玉の土偶展―原始芸術の世界―』埼玉県上福岡市立歴史民俗資料館

市川恵子（1999Ａ）「縄文時代前期板状土偶から中期河童形土偶へ-御坂町桂野遺跡出土土偶に関する一考察-『研究紀要』15　山梨県埋蔵文化財センター

市川恵子（1999Ｂ）「縄文時代前期土偶の再検討」『山梨考古学論集』Ⅳ　山梨県考古学協会

伊東信雄ほか（1981）『宮城県史』34（考古資料）宮城県史編纂委員会

伊藤正人・川合剛（1993）『名古屋の縄文時代資料集』名古屋市見晴台考古資料館

今福理恵（1998）「中部高地の縄文中期前半における土偶の基礎的把握」『土偶研究の地平』２　「土偶とその情報」研究会

今福理恵（2000）「中部地方の初期立像土偶の成立と展開」『土偶研究の地平』４　「土偶とその情報」研究会

岩手県埋蔵文化財センター（1982）『御所ダム関連遺跡発掘調査報告書』（下長谷地・元御所Ⅰ・Ⅱ）

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2004）『高畑遺跡発掘調査報告書』

内田憲治（1981）『武井・城遺跡』群馬県新里村教育委員会

太田文雄・安井健一（1994）『石揚遺跡』千葉県文化財センター

小笠原好彦（1984）「縄文時代前・中期の土偶」『宮城の研究』1 清文堂

長田友也（2009）「東北地方における縄文時代前期の儀器と精神文化」『2009年度山形大会研究発表資料集』日本考古学会

鬼形芳夫（1973）「高崎市八幡山遺跡出土の土偶」『まえあし』14

東国古文化研究所
小野正文ほか（1987）『釈迦堂遺跡群』山梨県立埋蔵文化財センター
小野美代子（1984）『土偶の知識』東京書籍
瓦吹堅（1994）『特別展東国の土偶』茨城県立歴史館(茨城)
北上市（1968）『北上市稲瀬町樺山遺跡調査概報』第3次「北上市史」1
北上市教育委員会（1969）『北上市稲瀬町樺山遺跡緊急調査報告』昭和43年度
楠本政助ほか（1973）『矢本町史」宮城県矢本町史編纂委員会
小林広和・里村晃一（1989）『一の沢遺跡調査報告書』山梨県教育委員会
小林康男（1997）「河童形土偶の系譜とその変遷」『土偶研究の地平』「土偶とその情報」研究会
斉藤尚己（1985 ）「北上川流域の土偶について」『日高見国』菊池啓治郎学兄還暦記念会
坂詰仲男・江坂輝捕（1938）「東京市板橋区志村小豆沢字四枚畑に於ける一石器時代住居祉の発掘に就いて」『考古学雑誌」28-6 日本考古学会
七ケ浜町教育委員会（1978）「大木囲貝塚―昭和49年度環境整備調査報告書」
七ケ浜町教育委員会（1979）「大木囲貝塚―昭和52年度環境整備調査報告書」
杉山武ほか（1989）「白座遺跡・野場遺跡(3)発掘調査報告書」青森県階上町教育委員会
鈴木克彦（1994）「円筒式土器の土偶」『東北・北海道の土偶』Ⅰ シンポジウム発表要旨　土偶とその情報研究会
瀬口眞司（2013A）「土偶とは何か？―その謎を探る」『縄文人の祈りと願い』ナカニシヤ出版
瀬口眞司（2013B）「土偶とは何か――図像に残された意図から用途と役割を探る」『紀要』26　財団法人滋賀県文化財保護協会
瀬口眞司（2014）「縄文人の感性と衝動－土偶に表現されたその精神世界－」『造形衝動の一万年』（平成二六年度秋季特別展図録）滋賀県立安土城考古博物館
瀬口眞司（2015）「初期土偶の根本的性質と展開過程」『古代文化』67-3、公益財団法人古代学協会
築館町史編纂委員会（1976）『築館町史』
東北歴史資料館（1996）『東北地方の土偶」
「土偶とその情報」研究会（1994）『土偶シンポジウム2 秋田大会 東北・北海道の土偶』1
長沢昌宏（1989）「花鳥山・水呑場遺跡」山梨県教育委員会
名古屋市見晴台考古資料館（1981）『大曲輪遺跡発掘調査概要報告書」
新津健・小野正文（1983）『土偶一千の女神が語る縄文時代の祈りとくらし』山梨県立考古博物館
能都町教育委員会ほか（1986）『石川県能都町真脇遺跡』農村基盤総合整備事業能登東地区真脇工区に係る発掘調査報告書
迫町史編纂委員会（1981）『迫町史』
原田昌幸（1995）『土偶』日本の美術第345号　至文堂
原田昌幸（1997）「発生･出現期の土偶総論」『土偶研究の地平』「土偶とその情報」研究会
原田昌幸（1998）「発生・出現期の土偶から中期の土偶へ」『土偶研究の地平』2 「土偶とその情報」研究会
春成秀爾（2009）「上黒岩遺跡の石偶・線刻礫と子安貝」『愛媛県上黒岩遺跡の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第154集　国立歴史民俗博物館
ハンソン,N.（1958：村上洋一郎1986改訳）『科学的発見のパターン』講談社学術文庫
本沢慎輔（1982）『雫石町塩ケ森遺跡』岩手県埋蔵文化財センター
前原豊（1982）「谷地遺跡」『C 7神明北遺跡・C8谷地遺跡」群馬県藤岡市教育委員会
町田市立博物館（1996）『縄文人の造形―土偶と土面―』
松室孝樹（2013）「発生期土偶に関する覚書」『紀要』26公益財団法人滋賀県文化財保護協会
宮城県教育委員会ほか（2003）『嘉倉貝塚』
茂木由行（1983）『黒熊遺跡群発掘調査報告書』(3)　群馬県吉井町教育委員会
茂木由行（1988）「黒熊第5遺跡」『群馬県史資料編』群馬県史刊行会
八幡一郎（1939）「日本先史人の信仰の問題」『人類学･先史学講座』第13巻　雄山閣
山形県埋蔵文化財センター（1995）『寒河江市高瀬山遺跡(1期)調査説明資料』
山田猛（1999）「各部身体表現から見た土偶の性格」『研究紀要』第８号　三重県埋蔵文化財センター
遊佐五郎ほか（1980）『沼崎山遺跡」豊里町教育委員会
米田耕之助（1984）『土偶』ニューサイエンス社
米山町史編纂委員会（1974）『米山町史』
レヴィ＝ストロース（1978）『神話と意味』みすず書房（大橋保夫訳1996）
レヴィ＝ストロース（1979）『構造・神話・労働』みすず書房（大橋保夫編2008）

挿図典拠

図１～３　瀬口2015より引用・一部改変
図４～８　各報告書等から引用・筆者編集

（せぐち　しんじ：調査課　安土分室長）

平成30年（2018年）３月31日

紀　要　第31号

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
520-2122　滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732-2
(TEL) 077-548-9780 ／ (FAX)077-543-1525
e-mail: mail@shiga-bunkazai.jp
http://www.shiga-bunkazai.jp/
印刷・製本：マルキ印刷株式会社